



姉妹都市盟約締結 40 周年を迎えて

鳴門市市民環境部文化交流推進課

ドイツとの友好の歴史

徳島県鳴門市とドイツ・リューネブルク市は、2014年に姉妹都市盟約締結40周年の節目を迎えました。リューネブルク市は、ドイツ北部にあるニーダーザクセン州の都市で、本市とは、人口規模が似ており、製塩で栄えたまちであることなどの共通点があることから、1974年に姉妹都市盟約の締結が実現しました。しかし、「なぜドイツの都市と交流をすることになったのか」というと、その答えはさらに歴史を遡ります。

鳴門市には、第一次世界大戦時に約1,000人のドイツ兵捕虜が収容された「板東俘虜収容所」^{ばんとうふりよ}がありました。当時の所長であった松江豊寿^{まつえとよひさ}が、ドイツ兵の人権を尊重し、非常に人道的な運営をしたことから、捕虜たちは開放的な収容所生活を送ることができました。ドイツ兵は酪農や乳製品の製造、印刷・出版、製パン、スポーツなど、ドイツの優れた技術や西欧文化を地域住民に伝えました。音楽の分野では、収容所内外で100回以上ものコンサートが催され、そのうちの 하나가1918年にアジアで初めて演奏されたベートーヴェンの「第九」交響曲演奏会でした。ドイツ兵はこうした活動を通じて、地域住民と温かい交流を繰り返しました。

第一次世界大戦終了に伴い、収容所は閉鎖され、ドイツ兵の多くは祖国に帰国しました。それから長い年月が経った1960年、長らく放置されていたドイツ兵の慰霊碑を偶然見つけた高橋春枝^{たかはしはるえ}さんらが、慰霊碑の清掃をしていることが新聞に取り上げられました。そのことがドイツに伝わり、元捕虜らから相次いで当時の資料の寄贈や寄付がされるようになりました。1972年、本市はドイツ兵と住民の友愛の歴史を伝えるため、鳴門市ドイツ館を建設し、多くの寄贈資料を展示しました。翌年、ドイツ館の開館1周年を記念して、この日独交流をさらに進めようと計画されたのが、本市とドイツの都市との姉妹都市提携です。そこで白羽の矢が立ったのが、鳴



リューネブルク市で姉妹都市提携盟約書に署名する両市長(1974年)

門市と共通項の多いリューネブルク市でした。こうして両市は姉妹都市として友好の絆を育み始めたのです。

その後、両市は親善使節団の相互派遣をはじめ、文化、音楽、教育など幅広い分野で交流を繰り返してきました。交流が進む中、「鳴門日独友好協会」と「リューネブルク独日協会」という団体がそれぞれのまちに発足し、両団体が先頭に立って、市民レベルの姉妹都市交流を活発に推進しています。40周年という節目を迎えた昨年、本市はこの歴史ある日独交流を未来に継承し、姉妹都市交流のさらなる発展と機運を高めようと、さまざまな記念事業を実施しました。

40周年記念事業

◆広報なると連載「リューネブルク魅力通信」

市民にリューネブルク市のことを知ってもらうため、同市の最新ニュースや歴史、街並みなどについてリューネブルク市広報担当者に執筆してもらい、「リューネブルク魅力通信」と題した連載記事を広報誌に掲載しました。

◆ミステリーバスツアーin なると

小学生に日独交流の歴史を知ってもらうため、ドイツ人国際交流員がガイドとなって、市内のドイツにゆかりのある場所を巡りました。自分の住むまちの新たな一面を知った子供たちは、その歴史やドイツという国に大きな興味を持ったようでした。



◆ 40周年記念講演会

大阪・神戸ドイツ総領事館のカールステン総領事と関西学院大学副学長で前在ドイツ日本大使館特命全権大使の神余氏のお二人を講師に迎え、「日本から見たドイツ、ドイツから見た日本」と題し、講演会を行いました。集まった多くの市民にとって日独交流の意義について改めて考える機会となりました。

◆ドキュメンタリーフィルム上映会

ドイツ人映画監督クラウゼ氏が撮影した板東俘虜収容所^{ばんどうふりよ}にまつわるドキュメンタリーフィルム「敵が友になるとき—日本のドイツ人捕虜収容所—」を上映しました。日本初公開とあって、新聞にも取り上げられ、市内外から観客が集まりました。

◆青少年の絵画交流

両市の青少年が、それぞれの住むまちの紹介したい風景や特産品の絵を描いて、鳴門市とリューネブルク市で展示しました。リューネブルク市では、鳴門海峡の渦潮やさつまいもの鳴門金時を題材とした珍しい絵が市内の学校内に展示され、在校生の注目を集めたそうです。

40周年のクライマックスとなったのは、メドケ・リューネブルク市長はじめ60人からなる第20回リューネブルク市親善使節団の来市でした。親善使節団は、盟約を締結した年から隔年で双方のまちを訪問しており、これまでに延べ1,300人以上の両市民が参加していますが、今回は過去最大の使節団となりました。



未永い友好を願って鳴門市ドイツ館前でバルーンリリース



小学生金管バンドの演奏に聞き入るリューネブルク市親善使節団員

使節団滞在中は、両市民が交流できる場として「日独市民交流会」を開催し、広く参加者を募りました。交流会では、リューネブルクの曲を演奏する小学生金管バンドや、ドイツ語で「第九」を合唱する保育園児が、使節団員ら参加者を驚かせました。集まった200人近い両市民は、バルーンリリースや交流昼食会、芸能鑑賞、この日発売となった「鳴門市・リューネブルク市姉妹都市盟約締結40周年記念オリジナルフレーム切手」の贈呈式など各種プログラムを通して友好を深め、交流会は記念の年にふさわしい盛り上がりを見せました。

豊かな未来を目指して

この姉妹都市交流を未来につなげるためには、若い世代の交流参加が欠かせないことから、近年は青少年交流にも力を入れています。使節団に青少年枠を設け、それぞれのまちでホームステイや学校訪問などの体験を通して国際理解を深める中で、参加者は大いに刺激を受けるようで、帰国後の彼らの成長には目を見張るものがあります。今後の姉妹都市交流に必ず寄与するものとして、両市ともに同事業の継続的な実施を目指しています。

この40年の間に、鳴門市とリューネブルク市は確固たる信頼関係を築き上げ、強い絆で結ばれるようになりました。これは、行政だけでなく、双方の市民がいつの時代も姉妹都市交流に対して理解を示し、関心を持って交流活動に参加した大きな成果です。今後も行政と市民が一体となって、実り多き姉妹都市交流を継続するとともに、現在進めている『アジア初演「なると第九」*ブランド化プロジェクト』を通して、この友好の歴史を国内外へ発信し、さらに交流の輪を広げていきたいと考えています。



リューネブルク市の学校を訪問する鳴門市の青少年

※「なると第九」とは？

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/index.html>